

## 就労の厳しさ

中村千鶴

全国心臓病の子どもを守る会奈良県支部

### Hardship of Work

Chiduru Nakamura

Association for the Protection of Children with Heart Disease in Nara Prefecture

私は三尖弁閉鎖症右室低形成です。生後5日で姑息手術を受け、1歳8ヶ月でフォンタン手術を受けました。

チアノーゼがあったため体育や部活動等は制限があったものの小学生、中学生の頃は殆ど周りの友人と変わらない学校生活を送ることができました。運動が大好きだった私は、放課後は日が暮れるまで男の子とサッカーをしたりするなど、運動神経も良い方だったと思います。それでも思春期を迎えると少しずつ病気に対する不安感や周りとの違いを自覚し始める時期がありました。

真面目に自分の将来を考えるようになり、高校3年間は勉強に力を入れ、難しいと言われていた志望大学に合格することが出来ました。

その一方で身体が大きくなったこともあり、その頃から体力面での疲れを今までよりも如実に感じ始めるようになりました。これまで殆ど周りと変わらない生活を送ってきた私は自然と心臓病だということや、すぐに打ち明けられず、頑張る無理をしてでも、元気を装う生活を送っていました。

大学生になると、自分と周りとのギャップはさらに大きなものになり、相当苦しみ葛藤も起こりました。家族や病院の先生からの助言もあり、大学生になって初めて私は自分の病気を自分の意思で周りに打ち明けるように心掛けました。

現実を受け止めなければならないという意味で苦労はしましたが、偽らない自分を見せるようにしたことで、大学では本当に支え合える一生の良き友人達と巡りあうことが出来ました。

3年程前になりますが、障がい者採用枠で就職活

動をし、何とか通信系の企業から内定を貰いました。この春から新入社員として社会に出ましたが、研修中に2回過労で体調を崩してしまい、約1ヶ月で退職を決断せざるを得ない状態になりました。勿論、会社の人事の方は体調を気にかけて下さいました。ただ、障がい者採用枠であっても研修が健常者と変わらないカリキュラムであることや、勤務時間も大幅には配慮してもらえない点など、体力にハンディーのある私には厳しいものでした。

心疾患を持ちながら私と同じように内定を決め、問題なく働ける方も多くいらっしゃると思います。今回、感じたのは同じ心疾患と言っても、体力や症状等には差が大きくあるということです。いくら業務内容に配慮を頂けても、そもそも週5日で8時間労働をクリアできなければ働くことが難しいというのでは、障がい者採用枠の意味はあるのかと疑問に思いました。

私は大学在学中に様々なことを考える中で、生まれてきてからこれまでどれだけ周りに支えられてきたのかを実感しました。だからこそ社会人として外に出ることで何か恩返しをしたい、頑張っている自分を見てほしい、そのような気持ちを抱くようになっていました。就職活動中にも体力的な問題を抱えながら何とか掴み取ることができた内定を、このような形で早期に手放さなければならないのは精神的にも大きなダメージになりました。

今、働き方改革が喚起されている中で、上場企業の障がい者採用枠の労働制度をもう一度改めてほしいと感じます。これからもう一度ハローワーク等で探せば、パートとして私の体力に合う労働環境の場

所は見つかるかもしれません。ただ、昨今では医療が進歩して、私達のような障がいを持つ多くの方々が社会に出ていけます。その時、心臓が悪くても正社員として働ける喜びを感じられることは非常に大切だと思います。私には自分の心臓病を周りに打ち明けられずにしんどくなってしまった時期があると書きました。矛盾する書き方にはなりますが、無理をしたから得ることのできた貴重な経験も確かにあります。だから、私はしっかり自分の身体と向き合い認めながら、社会人としても活躍したいです。また、心臓が悪くても働き、社会と繋がりを持って頑張っている人を、健常者が見ることは凄く意味のあることでことではないでしょうか。そんな気持ちを持ちながら、自分の場所を見つけられるように前を向いて努力し続けたいと思います。